

日中の詩管見

―酒について―

日本人は非常に勉強熱心な民族であり、いつも外国の進んだものを取り入れようと努めている。千数百年前から、日本人は中国古代文化を学習し輸入してきた。相当長い間、日本の社会生活において、漢詩漢文は重要な位置を占めていた。日本では、中国の古典文学は広く知られて盛んに研究されている。古いものであるほど、日本人は詳しいし、その研究も深いと思う。しかし、それに対して、今まで、日本文化はあまり中国には紹介されなかった。特に日本の古典文学は極少数の日本学研究者を除けばほとんど読まれていない。日本人のもっとも誇りとする『源氏物語』の中国語訳の出版さえもつい四、五年前のことである。ただし、時代の進展にしがって、日本は世界での地位がますます高くなり、多くの国から注目されるようになってきた。今日では、日本の歴史や文化を研究する人も日ましに増えてきている。中国に『詩経』があるのに対して、日本に『万葉集』があり、また中国に飲酒、讃酒で世に名を知られた「酒仙」「詩仙」がいたのに対して、日本にもこのような歌人がいたということも、現在の大部分の中国人には知られるようになった。それのみならず、日本の酒の詩に関する論著もけっして中国より少なくな

いことを私はここで特筆しておきたい。来日後、私はこの種の著書を読んで教えられるところが多く、またその深い見解に驚嘆せずにはおれない。以下に記したものは、ほとんど私の普段の読書の雑感ばかりであり、まとまった文章でないゆえに、勝手に「管見」という題をつけた次第である。

酒が何時、誰によって発明されたか、これはおそらく誰もはっきりと説明できない難題であろう。ある人は、酒は人類よりも先にこの世に出現したものであり、落ちた木の実がひとりでに発酵して酒になったと推測している。しかし、ほとんどの人は先に人間があつて、後に酒が造られたと考えている。中国の酒の歴史は極めて古い。伝説によると、夏王朝の禹王の時代に（紀元前21世紀頃）、儀狄という人がはじめて酒を造り、禹王に献上したのが最初だそうである。日本の「正月の屠蘇にしろ、日本酒にしろルーツは中国である。①」

ともに農耕を文化の基盤とした日本と中国は、季節の移り変わりや農事の始まりと終わりなどに、多種多様な祝祭日を設け、自然、飲酒の機会も多かった。時代とともに酒の種類も増え、それにつれて、人々の酒

曲 維

（漢文学研究室）

に対する感情も深くなくなっていった。冠婚葬祭、いろんな場合に必ず酒が登場する。昔、中国の江南では、子供の生まれた時に、親が酒を造り、酒がめを地下に埋めて保存した。そして、子供が成長して結婚する時に、披露宴の酒として、これを飲むという習慣があったと言われている。古代中国の詩人の中にも飲酒の風習が強く、飲まない人がほとんどいなかったほどであった。吉日や花と月の美しい時のみでなく、普段でも杯を交わしながら、揮毫をし、朗唱をし、詩文をものしていた。それがゆえに、古典詩は酒から生まれたと誤解する人さえいるほどである。

飲酒の善し悪しについては、昔から讀否両論があり、簡単には断定しにくい。中国では、清朝まで、何度か禁酒令が出されたが、一度も成功したためしがない。飲酒を好む人は隠語を用いてまで、ひそかに酒を飲んでいった。かつて「竹林の七賢人」は清酒と濁酒のことを聖人と賢人と呼んでいた。これについて、李白には次のような有名な詩句がある。「己聞清比聖、復道濁如賢」（昔清酒を聖人に比べたと聞く。また濁酒を賢人に喩えたと言う）②——李白「月下獨酌」ところが、驚くことに、日本の古人には、この中国の隠語を解して歌をものした者がいるのである。即ち、大伴旅人の「酒の名を聖とおほせしにしへの大きき聖の言のよろしさ」（酒の名を聖とつけた昔の大聖人の言葉の何とよいことよ）③——「讀酒の歌十三首」『万葉集』卷三所収）である。岩波書店刊『日本古典文学大系』や小学館刊『日本古典文学全集』の中の『万葉集』の解説を見ると、ここで旅人が上の中国の「竹林の七賢人」の故事を踏まえて、この歌を作ったことが知られる。かくも日中の古典は密接な関わりを持っているのである。実は、この禁酒令を出した魏王曹操は、逆にたいへん酒が好きだったらしく、「対酒当歌、人生幾何……何以解憂、唯有杜康」（酒ハ飲ムベシ歌ウベシ、人ノ命ハハカナキモノヨ……コノ憂イ如何ニ解クベキ、杜康酒ヨリホカニ何カアル——この日本の伊藤正

文氏の訳もまたすばらしい。——「短歌行」という名句を残している。昔、日本でも中国と同じような禁酒令が何回か出されたといわれている。『万葉集』の歌からも、この史実がはっきりと伺える。「酒杯に梅の花浮べ念ふどち飲みての後は散りぬともよし」（酒杯に梅の花を浮べて親しい仲間同士で飲んだその後は散ってもかまわぬ——卷八・一六五六）という大伴坂上郎女の歌の答えとして、「官にも許し給へり今夜のみ飲まむ酒かも散りこすなゆめ」（おかみでも許されているのだ。今夜だけ飲む酒でない。梅よ散らないでくれ。——卷八・一六五七）という歌が残っている。そして、この「和ふる歌」には、「右、酒は官に禁制していはく、京中間里、集宴することは得ざれ、ただし、親々一二にして飲樂することは聴許す、といふ。これによりて和ふる人この発句を作る。」という左注がついている。この禁酒令は『統日本紀』によると、天平九（七三七）年五月十九日および天平宝字二（七五八）年二月の二回にわたって禁酒令が出ている、とあるのに対し、「ここは時間的にはそれらの禁令よりさかのぼるかもしれないが、同種の禁酒令はそれ以前にもあったのであろう。⑦」とされている。日本の禁酒令はいずれもあまり厳しくなかったようである。

今日では、人々は科学的方法を利用して、酒を詳しく分析している。魯迅と親交の深かった、かの内山完造氏はある著作の中で、一人の学者の研究結果を次のように紹介している。「アルコールの量は常人なら血中濃度〇・一パーセント気分快活、〇・二パーセントから〇・三パーセントで足もとフラフラしておしゃべりの興奮状態になる。〇・七パーセント〇・八パーセントに達して酔睡状態に入りグデングデン型になって運動障害を起こしてくる。」（『中国人の生活風景』）たしかに、歴史上、狂飲のため失敗をしたり命を失ったりした人は少なくなかった。しかし、またこの酒の「お陰」で古代文学史上に何人かの特色のある詩人が生ま

れたことも否定できないであろう。中国では、飲酒詩人として、もっとも有名なのは陶淵明と李白である。陶淵明（三六五—四二七）は東晋末期の偉大な詩人であり、周知の通り、飲酒は陶詩の重要なテーマである。はじめて陶の詩文集をまとめた梁の蕭統はその序文中で陶詩には「篇々酒有り」と言った。これはやや大袈裟な話ではあるが、現存の百二十余首の陶詩には、たしかにほぼ半数の詩に酒が出てくる。こんなにたくさん飲酒詩を詠んだのは中国詩史ではもちろん、世界の詩史においても極めて稀なことである。陶淵明の「連雨獨飲」（長雨に獨り飲む）、「飲酒」（酒を止める）などの詩篇は後世に大きな影響を与えた。たとえば「菊を採る東籬の下 悠然として南山を見る」が「飲酒」の詩句だといえ、日本の読者もすぐあれかと思ひ出されることだろう。「連雨獨飲」も、「試みに酌めば百情遠く、鱗を重ねれば 忽ち天を忘る」という詩句を紹介すれば、それがいかにも陶淵明らしい思想と感情の反映であることがご理解頂けるだろう。

李白（七〇一—七六二）は唐代の最もすぐれた詩人の一人である。時代から言えば、陶淵明は飲酒詩の大先輩ではあるが、その詩の数量と狂飲ぶりにおいては、陶淵明とはとても李白に及ばなかった。李白自身も認めたように「百年三万六千日 一日須傾三百杯」（人生百年といっても三万六千日にすぎず、一日に三百杯を飲まねばならぬ—「襄陽歌」）。彼の摯友である杜甫はその狂酔状態を次のように描いた。「李白一斗詩百篇、長安市上酒家眠。天子呼來不上船、自称臣是酒中仙。」（李白は一斗の酒を飲むと百篇もの詩を詠む。長安の街の酒屋で酔っぱらって寝てしまふ。天子のお召しがあつても舟に乗らうとせず、自分のことを酒の仙人と言つた。——「飲中八仙歌」）李白は酒を多く飲んだだけに、詩もたくさん作つた。「將進酒」（酒をささげ進む歌）、「把酒問月」（杯をもって月に問う）などのロマンチックな想像に富んだ詩句は今でも中

国人に愛誦されているものである。いつも狂酔の精神状態で詩を詠んだためか、李詩の修辭は超人的なところが多く、「白髮三千丈」「雪花大如席」（雪の花片がムシロの如し）のような表現は、普通の詩人にはとても模倣できないものである。

日本の古典にも、酒を素材にした作品が少くない。『古事記』の「須佐之男命の大蛇退治」や『お伽草子』の「酒呑童子」などの物語において、酒はストーリー展開上の支えになったのである。また、記紀歌謡や万葉集の中でも、酒は無視できぬ役割を果たした。「豊御酒」（トヨは褒め言葉）、「待酒」（「帰ってくる人の無事を祈りまた祝福して造り待つ酒）、「無事酒」（飲めば無事平安になる酒）、「笑酒」などの表現は、酒の効用を充分に表わしているし、非常に鮮明な詩的イメージをもっている。

しかし、古代日本人の食生活の習慣と関係があるかも知れないが、中国の古典と比べれば、日本の飲酒詩文の数量はまだ多いとは言えない。飲酒詩の中で、比較的目立つものは大伴旅人（六六五—七三一）の「大宰帥大伴卿の酒を讃える歌十三首」である。漢文学の造詣の深かった旅人の歌は、形にしる、内容にしる、中国文学の影響が濃厚に見られる。

「なかなか人にあらずは酒壺に成りにてしかも酒に染みなむ」（中途半端に人間でいずに酒壺になってしまいたいものだ。そうしたら、酒にたっぷり染みることが出来るだろう。——卷三・三四三④）この歌の出典は『瑠玉集』（撰者不詳。全十五巻のうち今は二巻しか伝わらぬという）嗜酒篇の鄭泉の故事である。鄭泉は酒が好きで、死ぬ前に、自分が死んだら窯のそばに埋めよ。数百年後に土と化して、酒壺になったら、本望だと言つたという。この話も、前出の二種の『万葉集』の注釈にきちんと載っており、旅人がどの中国の古典を踏まえたか、日本人にすぐ分かるようになっているのである。

旅人の文学生涯は、彼が大宰帥になって九州に赴いてから始まつた。

とくに注目されたのは旅人を中心として出来た筑紫歌壇である。その時代、日本全土は大陸文化吸収のブームに包まれていた。長安京を模して、奈良の都を造り、唐朝に学んで律令制を実施した。宮廷でも、時々詩宴を催したりして、歌人たちは積極的に唐詩を模倣したと言われている。大宰府でも旅人の家に大勢の人々が寄り集って「梅花」の宴を開き、酒を飲み、歌を作っていた（梅花の歌三十二首・巻五 八一五―八四六、八四五―八五二）。

大宰府は地理的に優位にあり、中国文化を輸入する窓口であった。筑紫歌壇のメンバーのほとんどは、もともと中国文化の教養が豊かな人達で、彼らの作品が中国詩人の作品に酷似しているのも無理はない。「梅花」の宴に連った一人で、また中国人にもよく知られているのは山上憶良である。「貧窮問答歌」で、憶良は寒夜に獨酌し、民苦を念じた貧士の像を浮きぼりにしている。酒を精神の糧にし、貧困にもめげず「君子固窮」という節操を守るといふ詩心は陶淵明から源流を引いていると思われる。「貧窮問答歌」の「糟湯酒」は、本物の酒ではなく、酒の糟を湯にといたものであり、一種の、酒の代用品にすぎなかった。筑前国守であった憶良が困貧のどん底に落ちて、ろくな酒も飲めなかったというようなことはとても考えられない。問者に憶良の面影はあるが、フィクションの人物とみた方が妥当かも知れない。要するに陶淵明と山上憶良が「貧困」を主題とする創作の着眼点はまったく同じものである。陶淵明が自分自身のことを忠実に詩に詠んだのに対して、山上憶良が虚構の人物を歌ったところに、両者の相違点が見られている。憶良は糟湯酒を飲みながら、少ししかない髭をなでてからいばりしている男に自分を託して、貧しい農民を救えない自分の立場を自嘲しているのであろう。

われわれの生きているこの世にはいろいろの事物が存在している。これらの事物はまた詩人たちの手によって、それぞれ違った形で作品の中

に表わされる。何を素材にし、どのような角度から描くか、これはまったく詩人たちの選択によるものである。当然、詩人の人生観や文学観も作品に反映してくるのであろう。陶淵明、李白、大伴旅人たちの詩や歌を讀むと、悲哀に満ちたものが多い。その不遇や人生の苦から生じた哀傷の情に胸を打たれないものはいまい。

陶淵明の憂愁はおもに「大濟蒼生」（民を救う）という志を実現できなかったことによるものである（その点憶良も同じ気持を持っていることは前述した）。彼は「雜詩十二首・其二」で次のように詠んだ。「日月擲人去、有志不獲騁、念此懷悲悽、終晝不能靜」（日月人を擲て去り、志あるも騁するを獲ず、此れを念いて悲悽を懷き、晝に終るまで静かなる能わず。⑤）彼の出生後、家運がますます衰えていく中で、青年時代には、彼の生活はもうかなり貧しくなっていた。当時は門閥制度がひどく、官界も暗黒の世であった。陶淵明は何回か微官を務めたあげく、帰隱の道を選ばなければならなかった。彼の生活はまさに自分の詠んだ通り、「耕植不足以自給、幼稚盈室、餅無儲粟、生々所資、未見其術」（耕植もってみずから給するに足らず。幼稚、室に盈つるも、餅に儲粟なく、生生の資とするところ、いまだその術を見ず⑥）陶淵明は終生政治の失意と生活の貧困に悩まされていた。彼にとって、飲酒は帰隱とおなじく、現実からのやむえぬ逃避にほかならなかった。

李白もやはり一生不運であった。彼は「奮其智能、願為輔弼」（才能を發揮して、天子の力になる大臣になりたい）という遠大な志を抱いていた。しかし、唐玄宗は彼をただの「御用文人」として利用しなかった。権勢を輕蔑し、卑屈な態度を拒否した李白は、不幸も憂愁も人一倍多く抱えねばならなかった。「滌蕩千古愁、留連百靈飲」（千古の愁を洗ひ流さんと、百靈の酒を飲みつづける——「友人会宿」）李白は「長醉不醒」（いつまで酔うて醒めたくない——「將進酒」）によって、心の憂愁を

追払おうと努めたが、中々思う通りには行かず、結局「抽刀断水水更流、举杯消愁愁更愁」（刀を抽いて水を断てば水が更に流れる。酒を飲んで愁を解けば愁が更に増す——「宣州謝朓楼餞別校書叔雲」といわなければならなかった。李白の飲酒の心理は悲劇性が非常に強い。

陶、李と違って、大伴旅人の不幸と悲しみは一生涯のものではなく、一時的なものにすぎなかった。旅人は大伴氏という由緒ある貴族の出身であり、恵まれた環境の下で、後には正三位にのぼった高官であった。幸運な人間にはよい作品は出せぬとよく言われるように、旅人は大宰帥

になって九州に赴任した後、はじめて歌人として大活躍したのである。山上憶良が徭役や貢納にあえいでいた民の苦悩を「貧窮問答歌」で詠んだとすれば、大伴旅人は「讀酒歌十三首」で個人の憂悶と孤愁を歌ったといえよう。人生苦の実感を歌ったのは両者の一致しているところである。

大宰帥に任命されたのは、かならずしも左遷ではなかったが、六十歳すぎでこのような辺地への就任は、旅人にとってよろこばしいことでもなかったであろう。この任地で旅人にとって最大の不幸な事が起きた。すなわち、同伴して九州に下った愛妻との永遠の別れである。このショックは、旅人をして、一層人生のはかなさを認識させたに違いない。都の眷恋、亡妻の思慕、暮年の哀嘆などは「讀酒十三首」の哀傷な基調をなしていると思われる。「験なきものを念はずは一杯の濁酒を飲むべきべくあるらし」（甲斐のない物思いなどせず、一杯の濁酒を飲むべきであるらしい——卷三・三三八）「賢しきと物言ふよりは酒飲みて酔ひ泣きするしまさりたるらし」（賢がって物を言うよりは酒を飲んで酔い泣きするほうがまさっているらしい。——卷三・三四一）飲酒の礼讃、「酔い泣き」の心持ち、賢人ぶって物を言うことに対する嫌悪感から⑧、旅人の現実への不満もいささか感じられるような気がする。

酒は人間と切っても切れない縁をもっており、日常生活のみでなく、文学の世界でも重要な役割を果たしている。しかし、普段の酒とは違って、文学の中の「酒」は非日常性が強く、抽象された特殊なイメージを有することもある。「酔翁之意不在酒」（歐陽脩「酔翁亭記」）であり、古代の詩人や歌人が酒を飲んだり酒を讀えたりした本当の目的は、酒の力を借りて、人生や時弊を論じ、内心の感慨を述べるところにあったのではなかろうか。

四月に來日して以来、国語科の先生方いろいろとお世話になっており、この度の拙文の作成にあたっては、白方勝教授と加藤国安助教授に御教示いただいた。ここに感謝の言葉を捧げる次第である。

注①『中国の社会への散歩』中野謙二

②青木正児注

③④高木市之助注

⑤一海知義注

⑥松枝茂夫注

⑦『万葉集』（日本古典文学全集、小学館）より

⑧高木市之助氏は、この賢人ぶった人を憶良とみて、酒宴を途中で抜け出して帰っていく時の「憶良らは今はまからむ子泣くらむそれその母も吾を待つらんそ」の歌に旅人が反発したものとしている。「あな醜く賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る」の「の賢しら」をする人も憶良である。『吉野の鮎』所収「二つの生」参照。

（昭和六十一年十月十一日 受理）